

<u>治山施設等の名称</u>	「瀬戸のはげ山復旧と萩御殿」
<u>所在地</u>	瀬戸市萩殿町地内
<u>工事期間</u>	明治33年～昭和44年
<u>施設・工法の概要</u>	明治から昭和にかけてのはげ山復旧工事 萩御殿（皇太子殿下（大正天皇）や研究者らが復旧状況を視察した建物）

解説（要約）

愛知県は、三大はげ山県の一つに数えられ、明治38年には荒廃森林が愛知県内に約31,000haあったと言われている。

明治33年、愛知県による大規模なはげ山復旧工事が、現在の愛知県瀬戸市字西茨などにおいて施工され、それ以後、はげ山復旧工事が計画的・継続的に実施された。明治43年には、皇太子殿下（後の大正天皇）が行啓され、復旧工事を行った山をご覧になり、記念にアカマツを植栽された。

第二次世界大戦の戦中戦後に森林は再び荒廃地化した。昭和22年の林野庁設置を契機に治山事業としてはげ山復旧工事が実施され、現在の豊かな森林へと繋がっている。

解説

かつて愛知県は、岡山县、滋賀県とともに三大はげ山県の一つに数えられ、明治38年の調査では復旧工事が必要な荒廃森林が愛知県内に約31,000haあったと言われている。この地方の地質は第三期鮮新世の堆積物であり、侵食の被害を受けやすいところであったため、降雨の度に山が削られ土砂が流出し、下流に被害を与えていた。またこの地方は、窯業（瀬戸焼）が盛んであり、燃料として木材を使用していた事が森林の荒廃に大きく影響している。

明治30年に森林法と砂防法が公布されたこともあり、明治33年から大規模なはげ山復旧工事が、現在の愛知県瀬戸市字西茨などにおいて施工され、以後計画的・継続的に実施された。（第1期森林治水事業：明治44年度～昭和10年度、第2期森林治水事業：昭和11年度～昭和22年度）

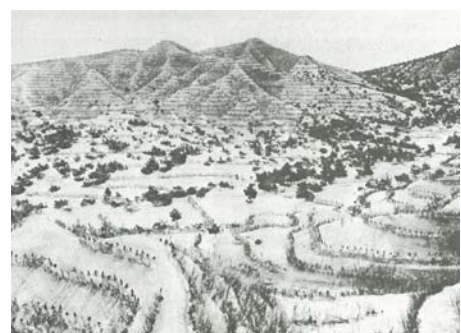
明治時代のはげ山復旧工事は、山腹斜面を均し、安定した斜面にした上、階段を切り付けた後に苗木を植栽し、少しでも早く森林に回復させることに重点を置いて進められた。植栽には、クロマ



はげ山分布図（明治22年）



荒廃状況（明治38年）



施工状況（明治41年）

ツ、ヒメヤシャブシ、ヤマハンノキ、ハギ、ススキを、また肥料として稲わら、わら灰、焼土が用いられた。

愛知県による初めてのはげ山復旧工事には関係者や研究者、技術者の見学が相次ぎ、工事が一望できる位置に萩を多く用いた建物「萩の茶屋」を設置して工事見学者に提供した。明治43年、この地に皇太子殿下（後の大正天皇）が行啓され、萩の茶屋から森林へと回復しつつある山々をご覧になり、記念にアカマツを植栽された。その後、行啓を記念して、萩の茶屋は萩御殿と呼ばれるようになり、瀬戸市萩殿町という地名の由来ともなっている。

当時の瀬戸地域は、第1期森林治水事業によるはげ山復旧工事によって導入された植生が定着し、森林の回復が進んだが、第二次世界対戦の戦中戦後の伐採、開墾により森林が再び荒廃し、はげ山に戻る箇所が多かった。

昭和22年、林野庁が設置され、治山事業として新たなはげ山復旧工事が実施され、昭和30年代も後半になると、尾張丘陵のはげ山はほぼ姿を消し、昭和44年に復旧工事は完了を迎えた。



皇太子殿下（大正天皇）行啓記念碑



復元された萩御殿



施工状況（昭和中期）



施工状況（昭和中期）



施工状況（昭和中期）

現在でも、瀬戸市南公園区域の森林内には、明治33年頃の工事跡が見られ、当時の工法や技術を偲ぶことができる。

推 奨

瀬戸市長 増岡錦也

瀬戸市の山々が明治の頃、山林伐採によりはげ山に状態になっていたのを復旧する工事が行われ始めた際、この工事を一望できる場所として多くの研究者などが視察に訪れましたが、明治43年に当時の皇太子（大正天皇）が視察された際に休憩所として小屋が建てられたことより「萩御殿」として呼称がつけられました。治山工事を広める場所として寄与していたもので、治山事業とつながりが深い場所です。



明治33年施工石堰堤（平成25年）